

高等教育におけるルーブリック普及へ向けたアプローチの検討 —大学教育センターによる普及活動の一事例を通じて— A Study of Approaches in the spread of Rubrics in Higher Education

千葉美保子（関西大学教育推進部）

キーワード ルーブリック、学習成果の可視化、教育の質保証、FD/Rubric, Visualization of Learning Outcomes, Quality Assurance of Higher Education, Faculty Development

1. はじめに

近年、急激な社会の変化を背景に、大学教育において学習成果の可視化が求められ、学習成果測定のための具体的な手法であるルーブリックに対する関心が高まっている。質的転換答申（2012）においては、学生の主体的な学びの推進とともに、学生の学習成果の把握のため、大学全体で共通の評価基準（アセスメント・ポリシー）の明示が提唱され、学習成果の具体的な手法としてパフォーマンスの評価に適したルーブリック評価などを活用することが推奨されている。

ルーブリックとは、「成功の度合いを示す数値的な尺度と、それぞれの尺度に見られるパフォーマンスの特徴を示した記述語からなる評価基準表」をいう（田中 2003）。ルーブリックにはさまざまな種類が存在し、課題・科目・クラス単位で個別に活用される科目ルーブリック、共通の科目群や複数の科目、学部・学科レベルで共通化されたコモングルーブリック、そして全米カレッジ・大学協会（AAC&U）のVALUEルーブリック¹に代表される大学の壁を超えて共有される汎用ルーブリックのメタルーブリックなどがある（松下 2016）。国内においても、関西国際大学を始め、コモングルーブリックの開発事例が見られる²。

ルーブリックには、学生が目標を意識し、学習活動に取り組むといった効果が明らかにされている（寺嶋・林 2006、遠海ほか 2012）。ルーブリックの普及に向けた活動として、多くの大学において教職員を対象としたセミナー・ワークショッ

プが実施されている。関西大学（以下本学）においても、教職員を対象としたFD/SDイベントの一環として、ルーブリックに関連するセミナー・イベントを実施しているが、2014年度より「大学教育再生加速プログラム（AP）」に採択されたことを契機とし、ルーブリックを活用した授業実践の普及活動を行っている。

一方で普及を進めていく上での課題点も多く指摘されている。松下（2016）は共通教育におけるルーブリックの開発・活用をめぐる7つの論点（「ルーブリックの評価される学習成果」、「ルーブリックの階層性と共有」、「ルーブリックの内容と開発主体」、「ルーブリックの活用」、「学生の参加」、「評価要件への対応」、「プログラム保証のための利用」）を提示している。これらの論点は共通教育に留まらず、ルーブリックの普及へ向けた課題といえる。

そこで本稿では、上記論点のうち、特に「ルーブリックの内容と開発主体」、「ルーブリックの活用」、「学生の参加」、「評価要件への対応」を踏まえ、大学教育センターが実施するルーブリックの授業実践の普及を背景とした活動として、教員へ向けたアプローチと学生へ向けたアプローチの事例を通じ、その効果と課題を考察する。

具体的には、(1) 教員対象のルーブリック開発支援、(2) 教職員対象ワークショップ、(3) 学生対象のガイドブックの開発の3つの側面から検討を行う。

2. ルーブリック開発支援

本章では、ルーブリックの開発支援を通じた、教員へのルーブリック普及活動を実践と課題を含め紹介する。

ルーブリックの開発にあたっては、どのようなタイプのルーブリックか、その中身をどんな方法で設定するのか、誰が開発するのが論点になる(松下 2016)。特に初めてルーブリックを導入する際、組織レベルでの導入においては評価者間での検討が適当であるが、個々の教員がルーブリック(おもに課題ルーブリックが想定される)を初めて開発する際に感じる負担を解消するためには、個々の教員にも応じる「草の根」の支援活動も求められる。

2.1. ルーブリック開発支援プロセス

本学におけるルーブリック開発支援は2014年10月にスタートし、筆者が本学に着任した2016年10月から、のべ10件の支援事例がある(2018年1月末現在)。件数としては多くはないが、後述するように、一定の効果が見られている。

本開発支援は表1の通り5つのプロセスを踏み実施されている。改善を含めたこのプロセスを循環させることにより、個別科目に適したルーブリックの開発が可能となっている。

表1 開発支援の手順

	手順
1	授業担当者より依頼を受け、センター教員がヒアリングを実施
2	センター教員が素案を提案し、授業担当者調整
3	授業内で実際に活用し、データを収集
4	データ分析結果をもとに、改善のための打ち合わせを実施
5	改訂版の作成

2.2. 事例紹介：教職系「西洋史」授業

本節では、科目担当者と大学教育センターとの

協働による個別支援の事例を紹介する。紹介するのは、教職課程2年次配当科目「西洋史」の事例である。本事例は筆者の私的なヒアリングからスタートしている。

本科目は社会科・地歴公民科の履修科目として開講しており、メインキャンパスである千里山キャンパスでは例年150名以上が受講する大規模授業である。本科目では最終課題としてこれまで授業でとりあげたトピックを題材とした2,400字程度のレポートが課されている。

科目担当教員は提出されるレポートについて改善していきたいと考えていた。授業1回分をレポートの書き方に費やしているにも関わらず、受講生から提出されてくるレポートの体裁はばらばらで、課題文を理解できていないものが多く含まれていたのである。この背景には、母数の多さによる学力差、歴史への関心の差があるのではないかと感じていた。

そこで、筆者はライティングセンターが発行する冊子『レポートの書き方ガイド』やライティングセンターとの授業連携とともに³、課題に関するルーブリックの活用を提案した。

まず、筆者が科目のシラバスや資料の提供を受け、到達目標や授業進行、受講生の傾向などを一時間程度でヒアリングを行い、レポートの構成や引用のルールに重きを置いた「テーマ設定」「データ・根拠」「引用」「参考文献」「表現・表記」の5観点のルーブリック試案を作成した。この試案をたたき台として、担当教員とともに4~5回の改定を行い、最終的には「課題の理解」、「要点の把握」、「情報の収集」、「自分の意見」の4観点のルーブリックが完成した。構成や引用・参考文献のルールはチェックリストとして添付した(図1)。この最終版ルーブリックを、レポートの書き方の授業回の際に配付するプリントに添付し、通常通りレポートの書き方の話をした後で「ルーブリックとはどういうものか」を説明し、提出前の自己評価としてルーブリックを活用するよう促した。

課題：アメリカ植民地がイギリスから独立することでアメリカ合衆国という国が誕生したことの意義を、主に国民主権との関わりを中心として、イギリスやフランスの市民革命と比較しながら2400字程度で述べなさい。

氏名： _____

●当てはまる箇所に○をつけて自分のレポートをチェックしてみましょう。

評価の観点	評価の観点の説明	4	3	2	1
A 課題の理解	与えられた課題の内容を把握したうえで、求められているものをテーマとしているか	与えられた課題の内容を十分に把握し、求められているものをテーマとしているか	与えられた課題の内容を把握し、求められているものをテーマとしているか	与えられた課題の内容を把握しているが、求められているものを一部テーマとしている	与えられた課題の内容を把握していない
B 要点の把握	与えられた課題のポイントを把握し、テーマにもとづいて適切な字数で整理しているか	与えられた課題のポイントを正確に把握し、テーマにもとづいて適切な字数で整理している	与えられた課題のポイントを把握し、適切な字数で整理している	与えられた課題のポイントが一部しか把握できていない、あるいは適切な字数で整理できていない	与えられた課題のポイントを把握していない
C 情報の収集	課題の解決に必要な資料を、信頼できるデータや先行研究※から探し出しているか	課題の解決に必要な資料を、信頼できるデータや先行研究から十分に探し出している	課題の解決に必要な資料を、信頼できるデータや先行研究から探し出している	課題の解決に必要な資料を、信頼できるデータや先行研究から一部探し出しているが、十分ではない	課題の解決に必要な資料を探し出していない、もしくは不特定多数が編集可能なサイトや個人のブログなど、信頼性の低い情報を集めている
D 自分の意見	課題の解決に必要な資料を使用したうえで、自分の意見を述べているか	課題の解決に必要な資料を使用したうえで、自分の意見をわかりやすく述べている	課題の解決に必要な資料を使用したうえで、自分の意見を述べている	課題の解決に必要な資料を使用しているが、自分の意見を述べていない	課題の解決に必要な資料を使用していない

※「信頼できるデータや先行研究」とは、大学・公的機関・新聞など公共性・信頼性の高い情報を指します。

チェックリスト【a】表現・表記

- 口語表現（話し言葉）を使っていない。
- 文体を「である調」で統一している。
- 一文が三行以上にわたる長文はない。
- 段落の書き出しは一マスあけている。
- 段落の長さが適切である。
- 誤字・脱字がない。
- 専門用語を正しく理解して用いている。
- 用語の表記を統一している。
(例：「ヴェネツィア」と「ベネチア」)

チェックリスト【b】参考文献・引用の形式（引用・参考文献がある場合のみ確認しよう）

- 引用部分には「」を用い、自己と他者の意見を区別している
- どこから引用したのかが分かるように著者名、出版年、引用ページを明示している。
(例：このような事象について、関大太郎は「〇〇〇」と指摘している（関大、2016、p.10）。)
- 三行以上の長い引用の場合は、前後各1行ずつあけ、左側を2字下げ、引用であることを明示している。
- 参考文献を記載する場合は、著者名、『書名』（出版社、出版年）を明示している。
- テキスト・配布プリント・教科書を参考とする場合は、丸写しではなく内容を踏まえた上で自己の意見を述べる。
- インターネット上の資料を用いる場合は、著者、公表機関、文書名、URL、閲覧日を明示している。

メモ： _____

図1 「西洋史」レポートルーブリック(最終版)

ルーブリックを導入した結果、「昨年までと比べて形式のできてないレポートが格段に減っていてその効果に驚いた」という科目担当教員の声にも象徴されるように、効果が得られた。

担当教員はメインキャンパスのほか、他キャンパスで開講されている同一科目も担当しているが、こちらは受講生10名程度で個別へのきめ細かい対応によって以前からレポートの体裁や内容は安定していたという。このことから、「細やかなケアが困難な大規模授業への導入により効果的ではないか」と述べ、ルーブリックの有効性を実感していた。

大学教育センター教員などが第3者の立場としてサポートすることにより、導入のハードルを下げ、次回からは担当教員自身が作成することが期待できる。組織的導入とともに、今後もこのようなきめ細やかなサポートを行うことにより、ルーブリックを導入するだけでなく、その効果を受講生自身にも実感してもらえるようにすることができるのである。

3. ルーブリック・ワークショップのデザイン

本章では、ルーブリックに関するワークショップのデザインについて取り上げたい。上述の通り、ルーブリックの普及に向けた国内における取組は、主に教職員を対象としたセミナー・研修会の実施が多い⁴。しかし、セミナーや研修会の問題点として、単発で実施されることが多く、継続性を担保が困難であるという側面を持っている。

そこで本章は、本学における教職員を対象として実施したルーブリック・ワークショップシリーズの事例を述べる。

3.1. ワークショップの概要

上述の通り、本学では、2014年度より教育開発支援センター主催ランチョンセミナーにて、ルーブリックに関するイベントの企画・実施をスタートさせた。2016年度には外部講師を招き、ルーブリック評価とレポート課題の提示方法に関するセミナーを実施し、これまでに計9回のルーブリックに関するイベントを実施している（表2）。

表2 ルーブリックに関するイベント一覧

年度	タイトル
2014	第19回ランチョンセミナー 「ルーブリックを知ろう・創ろう・使おう!!」
	第22回ランチョンセミナー 「知って得するルーブリック活用術～ルーブリック評価を体験しよう!～」※
2016	第23回ランチョンセミナー 「外国語の読解能力を評価する方法」
	第13回日常的FD懇話会 「ルーブリック評価とレポート課題の提示方法」
2017	第24・25回ランチョンセミナー 「知って得する評価のいろは(1)～ルーブリックを体験してみよう!～」※
	第27回ランチョンセミナー 「外国語の読解能力を評価する方法」
	第29回ランチョンセミナー 「知って得する評価のいろは(2)～ルーブリックを作成してみよう!～」

※同内容のセミナーを2度開催

ランチョンセミナーは、本学が保有するICT機器や授業支援ツールを日々の授業においてより円滑に、効果的に活用することを目的に実施しているミニセミナーである。非常勤講師を含む教職員を対象とし、実施日時は対象層の利便性を考慮し、平日昼の時間帯に設定した。各セミナーの所要時間は30～60分とした。

本章では、これまで実施したルーブリック・ワークショップの中から、2017年度に実施した1)ルーブリック評価体験ワークショップ、2)ルーブリック作成体験ワークショップについて具体的に紹介する。

3.2. ルーブリック評価体験ワークショップ

「知って得する評価のいろは(1):ルーブリッ

クを体験してみよう!」は、ルーブリックに初めて触れる教職員を対象とした約60分のワークショップである。本ワークショップはレクチャーとワークの2部構成とし、まず、第1部では講師によるルーブリック評価に関するミニレクチャーの後、国内外における活用事例を紹介した。

そして第2部では、同じ課題で作成された3種類のレポート例を実際にルーブリックで評価し、その評価をペア・全体で共有するワークを行った(表3)。

表3 ルーブリック評価体験ワークの流れ

ワークの流れ	内容
導入(2分)	導入、全体の説明、配布資料の確認
レクチャー	・ルーブリックの概要説明(15分) (1)ルーブリックとは? (2)ルーブリックの活用方法 (3)事例紹介
ワーク	・ルーブリック評価の体験(20分) (1)見本をルーブリックで評価(5分) (2)評価結果をペアで共有(5分) (3)グループで共有(10分)
まとめ(3分)	ふりかえり/アンケート記入

3.3. ルーブリック作成体験ワークショップ

「知って得する評価のいろは(2):ルーブリックを作成してみよう!」は、「知って得する評価のいろは(1)」の続編として、ルーブリックの作成を行った。前回と引き続き、セミナーを2部構成とし、第1部では講師によるミニレクチャーとルーブリック評価体験を実施し、続く第2部ではペアに分かれ、レポート課題と指導案をテーマに特定課題ルーブリック(西岡 2016)を作成した。この第2部の作成ワークのテーマは参加者に事前に募集をし、決定した(表4)。

表4 ルーブリック作成体験ワークショップの流れ

ワークの流れ	内容
導入 (2分)	・導入、全体の説明、配布資料の確認
レクチャー①	・ルーブリックの概要説明 (10分) (1) ルーブリックとは? (2) ルーブリックの活用方法 (3) 事例紹介
ワーク①	・ルーブリックの評価体験 (10分) (1) 1分間のプレゼンを評価する (×2回) (2) ペアで共有 (5分)
レクチャー②	・ルーブリックの作成方法 (5分) (1) ルーブリックの作成方法のパターン (2) ルーブリック作成の手順
ワーク②	・ルーブリック作成体験 (30分) (1) 課題見本を評価する (10分) (2) ルーブリックの作成 (15分) (3) 全体で共有 (5分)
まとめ (3分)	ふりかえり/アンケート記入

3.4. 取り組みから得られた示唆

以上、ルーブリックをテーマとしたワークショップシリーズのデザインを紹介した。参加者への事後アンケート調査からは「今後の授業改善を考えるきっかけ作りとなった」というリフレクションの機会となっただけでなく、さらに、ルーブリックの作り方についてさらに踏み込んだ内容のセミナーを開催して欲しい、という声も聞かれ、継続的な開催へのニーズを得ることができた。

本学におけるルーブリックを活用した授業実践は着実に増加しており⁵、ルーブリックのキャリブレーション（調整）の機会として、本節で取り上げたルーブリック・ワークショップを科目担当者対象の研修会などでも開催しているが、活用が一部教員に集中していることも確かである。

しかし、個別レベルでルーブリックを活用している教員にとっては、ルーブリックの論点のひとつ

である、「評価の案件への対応」の文脈において、評価の信頼性を高めるための研修の一環に位置づけることができるだろう。

4. ルーブリック・ガイドブックの開発

本章では、学生へ向けたルーブリック普及へのアプローチとして、学生向けルーブリック・ガイドブックの開発を報告する。

松下 (2016) は「評価要件への対応」の論点のうち、とりわけルーブリックの普及を妨げる要因の一つとして評価の実行可能性、とりわけ評価負担の大きさの問題を指摘し、ティーチング・アシスタント (Teaching Assistant) による評価や、学生による自己評価・相互評価など、評価者を教員以外に広げることなどを例示している。山田ほか (2016) でも、評価コストや評価主体のあり方をめぐむ問題に関し、学生に評価責任の一部を委譲した形でのピア・レビューの適用が提案されている。

以上のように、ルーブリックの普及に資する方法として、被評価者である学生の評価活動への関与が望まれている。しかしながら、学生を対象としたルーブリックを用いた評価活動への支援の実践事例は限られており、十分に検討されているとはいえない。そこで、学生の評価活動への関与を促す一策として、教員用とともに、学生を対象としたルーブリック・ガイドブックを開発した。

4.1. ルーブリック活用調査（予備的調査）

ガイドブックの開発の前に、まずアンケート調査の分析を通じ、学生がルーブリック活用の際に感じている課題点を検討した。2016年7月11日～7月21日に、2016年度春学期にルーブリックを導入している初年次科目の受講生を対象に、紙媒体によるアンケート調査を実施した（有効回答数 542 件）。ルーブリックを活用して課題に取り組んだ際に感じた課題点について、自由記述で回答を求めたものをカテゴリ化したところ、「評価基準の不明瞭さ」「課題への妨げ」「他者を評価する

抵抗感」などが課題として挙げられた。

以下、学生の記述を【 】に示しながら考察する。「評価基準の不明瞭さ」では【表現が曖昧で境界線がわかり辛かったのが難点である】などの記述が該当する。この問題は当該授業・カリキュラムのなかで評価がどのように位置づけられているのかという観点から議論される必要があるが、一つの方策としては、何らかの形で学生をルーブリックの作成に関与させることがある(スティーブンス&レビ 2014)。「課題への妨げ」では【細かく縛られすぎて、自由に書けない】【形式を意識しすぎるあまり、書きたいことにブレが生じることがあった】、「他者を評価する抵抗感」には【他人を評価するという罪悪感】という記述が該当する。これらの課題は、ルーブリックを用いる目的・意義が学生側へ十分に伝達できていないことが要因と推察され、事前説明により一定程度の解消が見込まれる。そこで、次節で紹介するルーブリック・ガイドブックの開発に着手した。

4.2. ルーブリック・ガイドブックの概要

前節の学生対象ルーブリック活用調査結果を基に、ルーブリック・ガイドブックを開発した。目次は表5の通りである。

表5 ルーブリック・ガイドブック目次

1	ルーブリックってなに??
2	ルーブリックの仕組みと使い方
3	ルーブリック活用のタイミング
4	ルーブリックの評価方法
5	ルーブリックの種類
6	ルーブリックを使うメリット
7	ルーブリックの作り方
8	Let's Try! ルーブリック体験

学生の評価活動への関与を促すため、本ガイドブックではルーブリックを成績評価(総括的評価)ではなく、自己評価・相互評価(形成的評価)で用いる場合を想定している。学生の理解を促すた

めに平易な表現を用い、構成は既に開発に着手していた教員用ルーブリック・ガイドブックの目次にあわせた。そして巻末に体験ワークを設けている。体験ワークは「評価体験」と「作成体験」に分かれ、評価体験にはレポート課題とプレゼンテーション課題を一例ずつ掲載している。プレゼンテーション課題は、2013年度に開講された共通教養科目「スタディスキルゼミ(プレゼンテーション)」の受講生及び担当教員の協力のもと動画教材を開発し、Web上にアップロードの上、QRコードから閲覧可能にした。評価体験ワークの手順は、1) まず個人で課題に対する評価を行った後、2) ペアで互いの評価結果を共有する流れとした。このワークを通じ、ルーブリックを用いた自己評価・相互評価のプロセスと効果を、学生・教員双方が経験し理解することを期待した。また、作成体験ワークでは、3段階のルーブリックを4人程度のグループで作成することを想定し、スティーブンス&レビ(2014)が考案した「ポスト・イットモデル」を作成方法例として採用している。このワークを通じて、学生に対しては学習目標・学習評価への理解が促され、教員へは評価負担・説明負担の解消や授業改善への糸口となることを期待した。

4.3. ガイドブックの試行

ガイドブックの実用性を検討するため、2016年度後期に開講された2年次配当科目「教育方法・技術論」の1クラス(受講生80名)を対象に、ガイドブックの試行を行った。授業内において、担当教員がガイドブックを用いルーブリックに関するレクチャーを行った後、レポートおよびプレゼンテーション課題の評価体験ワークを実施した。実施後、受講生へガイドブックに関する質問紙調査を行い、実用性と改善点を検討した。質問項目(4件法・自由記述)は計21問であったが、本研究に関連する項目を分析に用いた。

「ガイドブックを通じてルーブリックの理解が深まったか」を尋ねたところ、「そう思う(21.8%)」

「ややそう思う (70.5%)」と、概ね高い評価を得られ、ガイドブックの有効性が確認された。一方で、「ルーブリックを活用しようと思うか」という問いへは、「そう思う (16.5%)」「ややそう思う (50.6%)」が7割近くを占めたものの、消極的な回答も挙げられた。その理由として、「活用する機会がない」「評価基準が難しい」という意見が寄せられた。また、ガイドブックの内容に関しては、「より具体的な説明・例示が欲しい」「デメリットの提示が欲しい」という意見があった。特にルーブリックの作成方法に関してより詳細な記述を求める声が寄せられた。今後も継続的に試行実施を行い、ガイドブックの改善と評価を実施していく必要がある。

5. 今後の課題

以上、その取り組みの一事例として、本学大学教育センターにおける教員・学生双方へのアプローチ方法を紹介した。

ルーブリックは従来評価できなかったパフォーマンスを評価できるツールとして、大学教育においても広まって来ている。しかし、組織のなかでルーブリックを普及させていくためには、トップダウンによる導入とともに、上記のような個別の支援(ボトムアップ)を継続的に行うことにより、形式上だけでなく、ルーブリックを導入することへと繋げていく仕組みを構築していくことが不可欠である。

教員対象のルーブリック開発支援においては、おもに一对一での協働であるために、その妥当性を確認する機会を設けることが難しい。そのため、ワークショップをキャリアブレーションの場として展開させることで、ルーブリックの妥当性を担保することができるだろう。さらに、授業への導入に際し、学習者への評価不安を解消するために、ルーブリック・ガイドブックを活用することで、スムーズな導入が期待できる。さらにルーブリック・ガイドブックは、上述の通り更なる改訂作業を行うことで、より利用し易い内容にすることが

できるだろう。

しかしながら、これらのアプローチは本学においても体系的に実施されているわけではない。今後はこれら普及へのアプローチを体系的にとりまとめたプログラムの開発が求められるだろう。

付記

執筆にあたりご協力いただいた関西大学教育推進部の岩崎千晶先生、関西大学非常勤講師の大谷祥一先生に心より御礼申し上げます。

本稿は第23回大学教育研究フォーラムポスター発表および関西地区FD連絡協議会第10回総会「FD活動報告2017」ポスター発表を再構成し、大幅に加筆修正したものである。

註

- 1 AAC&U VALUE ルーブリック
(<https://www.aacu.org/value/rubrics> 2018年1月31日閲覧)
- 2 関西国際大学 KUIS 学修ベンチマーク
(<http://www.kuins.ac.jp/about/target/benchmark.html> 2018年1月)
- 3 関西大学ライティングセンターでは、授業外学習を支援するために、レポートの体裁やテーマ設定など基礎的なライティングスキルを説明した冊子『レポートの書き方ガイド』を刊行している。さらに授業担当教員と連携したレポート作成に関する授業外個別相談を実施し、学習者がより円滑なライティング支援を受けることができる体制を整えている。
(<http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/index.html> 2018年1月31日閲覧)
- 4 例えば、大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部が主催するFDプログラムなど。現在は一部学外にも公開されている。
(<http://www.tlsc.osaka-u.ac.jp/> 2018年1月31日閲覧)
- 5 2018年1月現在、ルーブリックを開発した授業実践クラスは全体で208件確認されている。(関西大学(2018)『21世紀を生き抜く考動人<Lifelong Active Learner>の育成 平成29年度成果報告書』)

参考文献

- 文部科学省 (2012) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)」
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm 2018年1月31日閲覧)
- 遠海友紀・岸磨貴子・久保田賢一 (2012) 「初年次教育における自律的な学習を促すルーブリックの活用」『日本教育工学会論文誌』第36号、pp.209-212
- 林透・星野晋 (2015) 「ルーブリック開発に関する実践的研究：初年次教育科目『山口と世界』を中心に」『大学教育』第12号、pp.10-21.
- 西岡加名恵編 (2016) 『「資質・能力」を育てるパフォーマンス評価ーアクティブ・ラーニングをどう充実させるか』明治図書.
- 松下佳代 (2016) 「共通教育における学習成果の直接評価ー成果と課題ー」『大学教育学会誌』38(1)、pp.29-34.
- 田中耕治 (2003) 『教育評価の未来を拓く』ミネルヴァ書房
- ダネル・スティーブンス&アントニア・レビ (佐藤浩章監訳) (2014) 『大学教員のためのルーブリック評価入門』、玉川大学出版部
- 寺嶋浩介・林朋美 (2006) 「ルーブリック構築により自己評価を促す問題解決学習の開発」『京都大学高等教育研究』第12号、pp.63-71.
- 山田嘉徳・毛利美穂・森朋子・岩崎千晶・田中俊也 (2016) 「学びに活用するルーブリックの評価に関する方法論の検討」『関西大学高等教育研究』第6号、pp.21-30.

千葉美保子 (関西大学 教育推進部)